

# 人間をめぐる浪漫的な、あるいはグロテスクな線引き —深沢七郎「風流夢譚」の構造分析を中心に—

李 在昶

## 要旨

深沢七郎の「風流夢譚」は、作中で際立つ革命や天皇制に関する表現、また作品にまつわる事件が原因となって、物語の構造分析が十分なされてこなかった。本稿はこの空隙を埋めることを目標とする。注目を浴びてきた夢の話ばかりでなく、夢が現実の反映であるという前提のもとで作中現実と夢との関係を中心に読み直し、既存の〈人間／もの〉、〈本物／インチキ〉の区分を融解・再構築しつつ人間性を浪漫的に模索することを新たな主題として見出した。その上で、そこに内包されている政治性を隠蔽する構造的イロニーが成り立っていることも確認した。しかし、そのような企画が無化され、ただの不敬小説として戦後に大きな波紋を呼んだことは事実であり、その所以を同時代において〈皇室／日本人〉の分離という転覆性を有する、グロテスクな天皇・皇太子夫妻の表象から探ろうと試みた。

**キーワード：**深沢七郎，「風流夢譚」，人間性，隠蔽，グロテスク

## 1. はじめに

深沢七郎の「風流夢譚」(『中央公論』1960年12月号)<sup>1</sup>は掲載雑誌にして13ページの短編小説だが、当時の文壇にとどまらず社会にまで大きな波紋を呼んだ作品である。発表直後の宮内庁や右翼団体からの抗議を初め、翌年2月1日には中央公論社の社長宅が襲われる「鳴中事件」まで発生した。他にも、三島由紀夫の推薦をめぐる論争<sup>2</sup>や事件以降の深沢の流浪に関する話など、作品にまつわる様々な逸話が知られている「風流夢譚」は、現在もなお深沢の作品集に収録されていない。この騒動の原因は言うまでもなく、作中の皇室に対する描写から際立つ〈不敬性〉にあった。危うく宮内庁からの名誉棄損の訴訟は免れたが、この作品から生じた暴力事件や出版社からの謝罪などは、ジャーナリズムや文学の領域に深い傷を負わせ、その傷跡はそれから長い間文壇における天皇制表現を萎縮させる結果をもたらした。そのため「風流夢譚」と〈「風流夢譚」事件〉<sup>3</sup>と名付けられた一連の出来事は、戦後文学における重大な転機と見なされてきた。この出来事を機に天皇制のタブーが蘇ったと受け取られたのだ。

一方、このような歴史的経緯のため、作品研究において「風流夢譚」が呼び起こした文壇および社会への多大な反響やその原因とされる作中の幾つかの表現に比して、物語分析、とりわけ作品の構造分析は注目されてこなかったことも確かである。作品の主な内容に当たる部分が、因果関係が成り立たなくても構わない<夢物語>であり、実際にそのあらすじが荒唐無稽であることも、物語全体の構造分析が比較的重視されてこなかった理由の一つとして挙げられるだろう。しかし、作品研究において一連の事件やその影響を論ずる前に、その主な原因とされる部分、すなわち天皇・皇太子夫妻の処刑がテキスト全体の一部としていかなる意味を持っており、当時<不敬小説>と捉えられる中でその意味の追求が放棄された所以は何か、ということ考察しなければならぬ。天皇制に関わる戦後文学として「風流夢譚」が有する意味はそこから探り当てられるだろう。

そこで、本稿ではテキストの構造分析を軸とした解釈を試みる。特に、皇室に関する表現が登場する夢の部分と、それに比してあまり議論されてこなかった現実の部分とのつながりに着目する。構造分析を通じてテキストの諸要素の関係を明らかにし、作品の構造的特質や主題を導出した上で、それが当時に受容されなかった所以を、夢の中の天皇・皇太子夫妻の表象が有する<グロテスク>な特質をもって説明しようとする。

## 2. 捨象される物語

研究において物語の構造分析が軽視される傾向は、作品の出現に敏感に反応した評論家および文学者により相次いで発表された数多くの評論に、すでに確認できる。加藤秀俊の調査によると、作品が掲載された当時、随所に見られる天皇制への直接的な批判や過激なる描写に対して、多くの一般読者は程度の差はあっても感情のレベルで不快感を禁じえなかったという<sup>4</sup>。このような大衆の反応を踏まえた上で、作品の持つ危険性や問題性を批判、あるいは擁護する形で、知識人らは先を競って批評や解説を発表した。それらの文章は、小説としての出来、安保闘争との関連、革命への態度、天皇制批判の意図、読み手としての感情など、多様な基準に拠って作品を評価しているが、大まかに肯定と否定の立場に分けられる。否定的な立場を取った中野重治、大岡昇平、中村光夫などによっては、皇室一家の実名を使った上での不敬な描写の持つモデルの問題への指摘、天皇制や革命のことを扱う態度や方法を問題視する文学の政治的実践に基づいた批判、そして作者に世間のスキャンダルを利用しようとした底意があったという意図への指摘などが行われた<sup>5</sup>。これに対して肯定的に評価した武田泰淳、吉本隆明、臼井吉見などの文章では、夢の内容は政治的なリアリティを持たない人形劇のようなものでそこに政治的な意図はなく、日本人の心の中に潜在している皇室への意識を問題視していると擁護したり<sup>6</sup>、逆に作中の天皇制への批判意識を認めながらその点で愉快で痛恨な作品だと評したりする傾向が確認できる<sup>7</sup>。皇室への不敬な表現が時代的なコンテキストと相まって、

「風流夢譚」は主に〈政治と文学〉の枠内で評価されたのである。そのような議論が行われる過程で、徐々に物語分析の重要性は捨象されていった。

さらに、これらの評論が以降の研究における重要な参考文献となり、作品の政治性をめぐる議論の様相は同じように繰り返される。黒古一夫は、この作品に精神領域にまで浸透し日本の民衆の生活構造を呪縛している天皇制を天皇・皇太子夫妻を殺すことで断ち切ろうとした意図があると解釈する反面<sup>8</sup>、相馬庸郎は、処刑場面などがリアリティを欠く人形劇のような有様を呈していることでこの小説が直接天皇制批判を意図したとすることは難しいと捉えるなど<sup>9</sup>、その枠組みの中で作品分析が引き続き行われてきたことが分かる。天皇制批判における作者の意図に注目する研究傾向は、以前から言及されてきた安保闘争との関わりに加え、1959年の皇太子の結婚も重要なファクターとして扱われるようになるに連れてより強まった。例えば、皇太子夫妻の結婚当時の日本の風景に着目し、その結婚における数少ない「非当事者」による異議申し立ての作品として「憂国」と並んで「風流夢譚」を挙げる新たな観点を提示した加藤典洋や<sup>10</sup>、加藤の観点を受け継ぎ、この作品には戦後民主主義の中での皇室と国民との合一を意味する1959年の結婚に対する深沢の悪意が含まれていると解した川村湊の論考<sup>11</sup>、他にもこの結婚に隠蔽されている天皇制の形式の変化および欺瞞性を意識し、国王の脱冠のようなカーニバル的な儀式を描いた作品と捉える研究や<sup>12</sup>、夢の中で生身の肉体を持たない天皇らとそのモノ的死の背景には平民との結婚を日本人が祝ったことへの深沢の困惑や違和感があるとした研究が確認できる<sup>13</sup>。

このような研究の流れの中で、「風流夢譚」の文学的本質が誤解、誤読されてきたとの問題提起は次々となされてきたが<sup>14</sup>、全体像としての物語をもってその解決を試みた研究は未だに数少ない。そこで、本稿では作品の政治性を論ずるに先立ち、この小説が有しているプロット構造、すなわちテキスト自体が語りかけてくる物語を議論の土台として構築することを目論む。天皇制や革命に関わる夢の話と現実の話とが結びついている様相を構造分析に基づき捉えてこそ、初めて政治性の有無を判断することができるようになるからである。それに加え、西川長夫<sup>15</sup>やヒカリクラブ<sup>16</sup>のように、深沢の前作からの連続性を見出し<sup>17</sup>、それを作品分析の手掛かりにしようとした観点を共有すると、「風流夢譚」の理解における物語分析の重要性がより明らかになる。深沢の大多数の作品、例えば、「檜山節考」（『中央公論』1956年11月号）、「東北の神武たち」（『中央公論』1957年1月号）、「笛吹川」（中央公論社、1958年）には、明確に設定された独特な状況のもとで自分なりの生き方を営為していく様々な人物の感情や振舞が主題を成しているスタイル、すなわち物語が重視されるという共通した特徴が見られる。もしもそれが「風流夢譚」でも発見できるならば、一見わけの分からない夢の部分＝反物語からも物語を読み取る必要が生じるのである。要するに、作品研究において〈「風流夢譚」事件〉や当時の文脈との関連が強調されることで、革命や天皇制に対する作品の政治的立場に焦点

が当てられ、物語自体は看過される傾向が見られるということだ。よって、捨象された物語を綿密に再検討することで、今まで光が当てられなかった、精緻に組み上げられた構造とその特質を明らかにしようとする。

### 3. 浮かび上がってくる物語：擬人化される腕時計と物化される皇室

#### 3.1 腕時計の形象化としての皇室

「風流夢譚」は題名の通り「風流」に関する「夢」の物語で、語り手である「私」によって数か月前のある夜に見た夢とその前後の話とが述べられる。具体的には、導入部と結末に当たる現実の話の中に夢の話が挿入される〈現実—夢—現実〉の構造になっている。夢の話に比べて短い現実の話の中で主に語られているのは、腕時計についてのことである。この腕時計は、真偽のほどは不明だが、友人が帰国するアメリカ夫人から捨値で買ったもので、母が危篤になり売ると言われ仕方なく買った時計である。しかし、それは腕から外すと止まってしまう妙なもので、その修繕のため訪れた時計屋では、すごいものだと言われ金張りのバンドまで買ったが、後にデパートの時計部の話からそのマークはスイス製だが「トタンのメッキ」みたいなものが施された「インチキ時計」であることが分かる。インチキとしての性格は、甥の持っている高級な英国製のウエストミンスターの大型置時計との対比によってより浮き彫りにされる。それでも「私」は、腕時計が止まることを「寝る」と見なし「俺が寝ると俺と一緒に寝てしまう」(328)という理由で、なんとなく腕時計への愛着を持っている。まとめれば、夢を見る前の現実の部分では、インチキではあるが一緒に寝る腕時計への「私」の愛着について物語られるのである。

一見すると、インチキ腕時計は以降の夢の内容とは全く関連を持たないかのように見えるが、実は作品解釈の核心をなすものである。その重要さは冒頭の文、「あの晩の夢判断をするには、私の持っている腕時計と私との妙な因果関係を分析しなければならないだろう」(328)においていち早く明示されている。「夢判断」という言葉に着目し精神分析的観点を取った分析もあるが<sup>18</sup>、作品の始まりから腕時計との関係を夢の解釈の手掛かりとして提示している点を考えると、ここでは「夢判断」より「腕時計と私との妙な因果関係」に重点が置かれていると思われる。語り手が夢を述懐する中、あえて腕時計の話がその首尾で扱われる構造になっている点も、夢の解釈において腕時計がキーワードであることを強調する。さらに、先回りして言えば、「妙な因果関係」を夢を見た後に語られる内容に限定せず、夢を見る前に説明される一緒に寝る関係をも含めて捉えると、夢と現実との意味的なつながりが初めから前提として提示されているとも言える。これらの点を踏まえ、冒頭の文＝ガイドラインに沿って「私」と腕時計との関係を念頭に置きつつ、夢の内容を具体的に考察していきたい。

夢のあらまはは次のように簡略化することができるだろう。井の頭線に乗り渋谷駅で

降りた「私」は、停留所でバスを待つことになり、その途中ですでに暴動が始まり各地で戦いが展開されていることを知る。三番目のバスに乗って皇居へ着いた彼の目前では、祭りのような雰囲気の中、皇太子夫妻の処刑が行われる。その後に登場した老紳士に連れられて行くと天皇夫妻の処刑はもう終わっており、老紳士は天皇が遺した辞世の歌を解釈してくれる。突如現れた昭憲皇太后と格闘をすることになるが、老紳士は隣で何気なく皇后の辞世の歌を解釈し、ついに皇太子夫妻の歌まで説明する。戦いがそろそろ終わりつつある中、打ち上げられた花火を見ながら「私」は自死することを決め、自分も辞世の歌を作りピストルで頭を撃つところで夢から目覚める。夢という形式に則し因果関係が成り立たない荒唐無稽な物語で、その点でむしろ夢としてのリアリティを持っていると言える。そして、ここでは暴動が行われている状況下での皇室と「私」との関係が主となっている。

ここで注目すべきは、生きている者が死し、死んだ者が蘇る、生死が逆転している夢の中<sup>19</sup>での皇室の〈インチキ性〉である。天皇夫妻はすでに殺され「首なし胴体」として、皇太子夫妻は空っぽの缶のような音がする首の持ち主として現れる。

そうしてマサキリはさーっと振り下ろされて、皇太子殿下の首はスッテンコロコロと音がして、ズーッと向うまで転がっていった。(中略)私に変だと思うのは、首というものは骨と皮と肉と毛で出来ているのに、スッテンコロコロと金属性の音がして転がるのを私は変だと思わないで眺めているのはどうしたことだろう。(「風流夢譚」、333)

「美智子」という名称が実際の皇太子夫妻を思わせる一方、作中の描写は彼らを本物とは関係のない偽物＝インチキなものとして見せているのである<sup>20</sup>。彼らが無生物のように描写されるのに対し、昭憲皇太后は生き生きとした人物として描かれる。もともと、一般的に美人として知られた彼女の見た目とは全く違う姿をしている点で、昭憲皇太后も天皇・皇太子夫妻と同じく本物ではない何者かとして登場しているのは確かである。

人物ばかりでなく、皇室に関連する様々なものも本物とは思えない、インチキなものとして現れる。三種の神器は「クズ屋」も買わないほどみすぼらしい「オモチャ」として描かれており、文化勲章も「大きい鎖のネックレス」と表現される。皇室を象徴する記号が露骨に諷刺されているのである<sup>21</sup>。天皇・皇太子夫妻の辞世の歌もインチキなものとして取り扱われている。

「磯ちどり沖の荒波かきわけて船頭いとほしともしび」までは「濡れる」の序で、歌の意味はただ「濡れる」というだけだそうである。(中略)「つまり、なぞなぞみたいに作ればいいですね、和歌は」(「風流夢譚」、335)

老紳士は「辞世だから御生涯中唯一首しかないおん歌だ」(334)と言いながらも、その歌をただ一単語の意味しか持たない短歌としている。天皇夫妻の歌、その中でも最後の歌の有する特別な意味や地位が剥奪されているのである<sup>22</sup>。つまり、夢では皇室の代表的な象徴とも言える三種の神器や文化勲章、短歌が実際のそれとは程遠い描写や説明により戯画化されている。

皇室の人物たちの処刑の場面で実名が言及される一方、彼らがインチキでもあることは多様な解釈を招いた。人形劇あるいは類似革命が行われる作品に政治的意図はなく<sup>23</sup>、作者が皇室肯定の認識を持っていると捉える見解がある一方<sup>24</sup>、革命を経験したことのない日本を侮蔑していると批判する見方もある<sup>25</sup>。そのような分析に先立って、根本的になぜ「私」はこのような夢を見ているのかを考えざるを得ない。それを捉えるためには、作中の夢と現実との関係を想定する必要がある。ここで上述した夢と現実との意味的つながりを想起したい。つまり、夢に作中現実が反映されているとの観点のもとで考察するということである。この際、作中現実の中で夢の皇室表象との関連が窺われるものは、夢判断の手掛かりとして言及された腕時計である。まずインチキ性を持っている点でも共通しており、とりわけ天皇夫妻と昭憲皇太后の衣装についている「英国製の商標マーク」がその類似性をはっきりと示している。宮内庁が管理しているはずの彼らの服になぜかついてある商標マークに対して「私」は変だと述懐する。

(前略) 皇后はブラウスとスカートで、スカートのハジには英国製と商標マークがついているが、私は変だとも思わないで眺めていた。仕立上がったスカートにそんな商標マークがついている筈はないのに、変だとも思わないで私は、(天皇の背広も英国製だ) と思って眺めているのだ。(「風流夢譚」、333)

(前略) ツーピースのスカートのハジにはやっぱり英国製という商標マークがはっきり見えているのだ。(「風流夢譚」、334)

あえて衣装の原産を英国にした設定は、彼らが腕時計の形象化であるかのように思わせる。なぜなら、高級な外国製の服を着ているが、中身は本物ではない人形あるいは機械のように描写されている彼らと、「スイス製のマーク」はついてはいるが、部品は「トタンのメッキ」である腕時計とがオーバー・ラップするからである。

### 3.2 腕時計の両義性：インチキ性／人間性

夢の天皇らを現実の腕時計が形象化されたものとして捉えようと、解決すべき一つの問題が生じる。腕時計への愛着と皇族への反感、つまり両者に対しての「私」の相反する

態度をどう説明するかということである。この部分が明らかにならないと、夢と現実とのつながりは成り立たないだろう。そこで問題解決の糸口を探るため、夢での「私」と皇室との関係、現実での「私」と腕時計との関係を再検討してみたい。

まず皇室に対する「私」の反応について辿ってみると、夢の中で傍観者のような態度を取っていた彼が、皇室に関連する事柄に対しては積極的になる様子が極めて目立つ。いつの間にか停留所の一番先頭に立ちバスを待つ「私」は、警視庁や自衛隊との戦いが行われている場所行きのバスには乗らず、乗り場の前にとどまっている。しかしその後、隣の中年の職業婦人と会話を交わした「私」は、彼女と行動を共にするか迷っていたが、次のバスが皇居行きだと言われると、「皇居へ乗り込むんですか。それじゃアぜひ連れてって下さい」(331-332)と喜んで同行を望む。それまでは周りの状況に対して他人事のような態度で一貫し、特に戦いを恐れていた「私」が、皇居では戦いが行われていないことを知る由もなかったのに、なぜかそこへ行こうとする。ここに皇室への彼の関心が垣間見える。皇居に着いてから再び傍観者のように振舞っていた彼は、昭憲皇太后が登場するといきなり彼女に飛びかかって罵り始める。

「なにをこく、この糞ツタレ婆ア、てめえだちはヒトの稼いだゼニで<sup>エーヨーエーガ</sup>栄養栄華をして」(「風流夢譚」、335)

「なにをこく、この糞ツ小僧、8月15日を忘れたか、無条件降伏して、いのちをたすけてやったのはみんなわしのうちのヒロヒトのおかげだぞ」とわめくのだ。「こんちくしょうッ」(中略)「終戦になって生命が救かったのは、降伏するようにまわりの人だちが騙すようにてめえの息子にそういうことを教えてやったのだぞ。その人だちは誰だか教えてやれか、米内、岡田、鈴木貫太郎ッ」(「風流夢譚」、336)

ここからは天皇制への関心が窺われると同時に、その関心は歴史的事実に基づいた批判意識に拠ったものであることが分かる。「(困るなア、俺のマサキリで首など切ってはキタナクなッ)」(333)のように、皇太子夫婦の処刑場面で「私」が見せる、彼らの死よりも「マサキリ」が「キタナク」なることを気にする様子からも批判的態度が察知できる。

先行研究の中では、皇室に対するこのような批判的意識を認める一方で、「私」の自死を天皇や皇太子に倣って彼自身をも処刑するための行動と捉え、日本人であるがゆえに皇室に回収される「私」も批判の対象となっているとの解釈もよく見られる<sup>26</sup>。この観点の前提としては、逃れられない天皇制の呪縛、つまり<「私」—天皇—日本人>の連結が想定されているのである。しかし、果たして「私」の自死が天皇制への回収を意味するのだろうか。そうとは言い難い。夢の随所に皇室との距離感が意識的・無意識的に強

調されており、自死を行う場面からも同化への拒否が見られるからである。具体例としては、辞世の歌の剽窃、死に方でのずれ、頭の中に詰まっているウジが挙げられる。

まず「私」の歌作りの場面を見ると、二度も自分のものではなく他人の作、すなわち『万葉集』の防人の歌の一首と松尾芭蕉の俳句の一首を歌う<sup>27</sup>。よく考えれば、天皇・皇太子夫妻の残した四つの辞世の歌も、老紳士による短歌の解釈も、「私」の夢の中のもの、つまり全て彼の無意識が作り上げたものである。言い換えれば、彼は夢の中で自分の知識が無意識的に組み合わされた結果の世界を視覚的に体験しているだけである。夢の世界が「私」の知識によるものであることは、作中の説明からも確認できる。

また、昭憲皇太后が「なにをこく」とか「糞ッ小僧」などという甲州弁を知っているかどうか、皇室ではこんな風なときに使う悪態はアクセントも違った言い方をするのだと思うが、夢を見ているのは私だから、私以外の知識が夢の中に出て来る筈がないので、これはあとで考えると納得することが出来たのだった。（「風流夢譚」、335）

夢で昭憲皇太后が甲州弁を使っているのも、皇族の怒った時の言い方が「私」の知識外のことだからである。上で引用した文の中で、昭憲皇太后に裕仁天皇を指して「てめえの息子」と呼んでも誤りを指摘されないのもまた、「この昭憲皇太后は明治天皇の妃か、大正天皇の妃かも私は考えないし」（334）といった誤認に起因する点で同じである。したがって、この夢の世界を彼の知識の枠内で無意識的に造形された空間とすると、天皇らの辞世の歌を創作する能力を有する「私」が、自分の歌を作ろうとする際に限って、しかも二度も人のものを剽窃するという点は、結果的に作らないことに等しいと言える。要するに、「私」が辞世の歌を作らないという点に、処刑の前の厳しい状況下でも辞世の歌を遺す「風流」を有する皇室の人々と自分とを区別しようとする無意識的な意志が推察できるのである。

夢の中で彼の意識的な試みが無意識的に拒否される様相は、「私」が自死を決心する場面でも見られる。騒動が終わっていく状況下で美しい花火を見ていた「私」は、望みが叶ったかのように、あるいは生死が逆転している夢の世界観に従いたかったかのように突然腹を切って死ぬことを決意する。しかしながら、なぜか彼はピストルで自分の頭を撃つことになる。辞世の歌を作る際と同じように、夢を見ている主体の意志に反する方向に夢が展開されているのである。この状況での切腹という死に方が一種の殉死となり天皇との連関が生まれてしまう可能性があることを考慮すると、ここでの死に方のずれも、彼の無意識があらかじめ皇室への同化を拒絶していることの表れと捉えられよう。

では、繰り返し強調される「私」と皇室との区別に根拠はあるだろうか。その根拠は、彼が頭を撃った後に視点が変わり自分の頭蓋骨の亀裂の内に詰まっている「ウジ」を見



付ける場面と、後でそのことに納得するくだりに見受けられる。

(前略) これは、ふだん、私は人間の頭の中にはウジみたいなものが一杯つまっていると思っていたので、無意識のうちでも稲妻のようにふだん思っていたウジやウジの卵がひらめいたらしく、これはあとで考えると納得することが出来たことだった。(「風流夢譚」、339-340)

彼が普段から人間の頭に入っていると思っていた通りに、彼自身の頭にはウジが詰まっている。ここで、それと対をなすものとして、金属性の音がする空っぽの皇太子夫妻の頭が喚起される。皇太子夫妻の処刑場面で彼らの頭の中にはウジがいなかったこと、言い換えれば「私」が無意識的に彼らの頭を空っぽにしたことは、論理的に「私」が彼らを人間と見なさなかったことに等しい。ここで皇室との区別の根拠が<人間性>であることが分かる。自分と彼らとを徹底的に分離し、同化を拒否し続ける無意識の発露の根底には、人間の姿をしているが人間ではない天皇らと、人間である自分との間に引かれた確固たる境界線があるのだ。自分を眺める、夢の中での唯一の視点転換は、その違いを表出させるためになされているのではないか。その結果、夢の中の皇室は、本物ではないばかりでなく、人間でもないという意味でインチキなものとして規定される。

人間性は、現実の「私」と腕時計との関係においても核心をなす要素となっている。前述したように「私」が腕時計に愛着を抱くのは、インチキだからではない。逆に、腕時計のインチキ性は否定的に描かれる。腕時計が純金のすごいものだと言われ期待した「私」は、実際にはインチキ腕時計だと聞いて失望し、友人の言った「アメリカ夫人の捨値ということも本当かどうか疑わし」くなり、すごい時計だと時計屋さんが感心したのも「バンドを売りつけるためのお世辞だったらし」く思われ「不愉快」(329)な気持ちになる。彼らの嘘、つまり不正＝インチキな行為に騙され買ってしまった腕時計には、否定的な意味でのインチキ性が内包されているのである。注目すべきは、腕時計がインチキなものである一方で、人間的な存在としても描かれている点だ。伊狩弘が、持ち主の活動に合わせて動く点から人間味を指摘したように<sup>28</sup>、腕時計は最初から一緒に寝起きする、まるで同伴者のような存在として擬人化されている。殊に最後の場面、「(あッ、俺が夢を見ていた間は、この腕時計も起きていたのだ)と私は涙が出そうになる程嬉しくなって腕時計を抱き締めた」(340)に至っては明らかに人間性を獲得している。一緒に寝起きするという一種の相互作用には、以前まで腕に巻く、外すという条件が付いていたが、この場面では腕に巻かなくても動く、すなわち物理的な操作や接触がなくても精神的に相互作用が行われるようになっていく。精神的な交感ができる点で、腕時計という機械装置はより人間に近づく。つまり腕時計は、「トタンのメッキ」のような部品からなっており嘘に騙されて買った点では<インチキ性>と深く関連するものだが、同時

に精神的な交感ができるという意味では<人間性>を有する本物と言えるものでもある。

よって、腕時計が表象するインチキ性と人間性は作品を貫く要素であり、現実の腕時計と夢の皇室とのつながりを捉える手掛かりになる。これらの要素を中心に作品構造を読み直してみると、現実の腕時計とそれにまつわる他人との関係により浮き彫りにされるインチキ性に対する「私」の失望感と不愉快さの反映として、彼にとってインチキな存在を象徴する皇室が夢で描かれていると解釈できる。昭憲皇太后への発言の中、裕仁天皇によって終戦を迎えたという戦後の<聖断>史観を「私」が嘘としている点でも、嘘=インチキに基づき成立している天皇制と、嘘に騙されて買った腕時計とのつながりが分かる。夢での天皇一家は本物でも人間でもなく、ひいては不正に基づいている、紛れもないインチキとされているのである。だからこそ、夢から目覚めた後の現実では、精神的な交感まで可能になった腕時計、すなわち肯定的な意味で人間よりも人間的な腕時計に「私」は「涙が出そうになる程嬉し」さを感じるのではないかとすると、腕時計と「私」との「妙な因果関係」とは、物理的かつ精神的な相互作用による人間的な紐帯と言えらる。このような構造に基づく、その夜の夢は、人間的な関係と対比される腕時計のインチキ性を表象する皇室をもものとして描きつつ諷刺・揶揄する物語だと「判断」することができ、先に述べた腕時計と皇室への相反する態度の問題も解決できる。そうであれば、作品の最後に提示される「三つの浪漫的小品より—その(一)」の「浪漫」とは、理想的なことの実現という意味で、天皇ら=インチキが処刑される夢だけでなく、腕時計=ものとの人間的な関係をも指しているのではないかと。従ってこの作品の主題は、既存の<人間/もの>、<本物/インチキ>の図式を解体・再構築した上での、人間性への浪漫的な模索である、と捉えることができるだろう。

#### 4. 隠蔽を無化するグロテスク

##### 4.1 隠蔽としての構造的イロニー

人間とものとの浪漫的な関係を物語るこの作品に、先行研究で指摘されてきた天皇制への批判や革命への希求などの政治的な意図が全く内包されていないとは断言できないだろう。皇室がインチキの象徴として批判されていることに加え、同時代性を明白に表す題材および表現、そして他の作品との主題的類似性などを考慮すると、深沢の政治的見解が内在していることも確かだからだ。

それ以前の作品、例えば「檜山節考」、『笛吹川』、「東北の神武たち」における一貫した主題意識の一つとして、逃れられない伝統または掟のもとに置かれた庶民の生き方を繊細に描出することが挙げられる。「風流夢譚」をその作品群に位置付けて捉えると、作品を貫いている上下対立のモチーフ、つまり夢の中での暴動において下っ端の巡査や自衛隊員が刑事や幹部と対立する構図や、天皇・皇太子夫妻の頭が地に落ちるイメージなどと関連しつつ、庶民の立ち位置での天皇制批判が露わになっていることが分かる<sup>29</sup>。

また、作中で直接革命や暴動という素材が言及されていることや、天皇夫妻より皇太子夫妻に焦点が当てられていることは、1960年という発表時期と相まって安保闘争や皇太子の結婚との深い関連を仄めかす。ゆえに、前述したこれらの出来事に関する二つのエッセイでの考えが作品に反映されているとも推測できる<sup>30</sup>。

こんど皇太子妃が民間から選ばれて新種が交配されてしまったので僕の予定はすっかり狂ってしまった。(中略) 血族結婚が長い間続いて、頭脳は弱くなって、頭も顔も小さく足長蜂のような形で、胴体は長くてムカデの様な、手や足は無毛で兎の様な形で眼鏡をかけていて、大きさは一メートル四十糎ぐらいの皮をむいた蝦や蝦蛄(シャコ)の様で、くねくね動いている天皇御一家の写真を予想していたのだ。 (中略) 天皇陛下や国民が幸福になるにはもつと血族結婚が続けばいいと思う。これが僕の精一杯の祖国愛なのだ<sup>31</sup>。

政治に関心がない僕もこんどのアンポ反対には巻き込まれてしまったのだから自分でも意外だった。(中略) それで、僕にはまったく関係はないことだと思つたがトニカク、アンポ反対の騒ぐ方がいいと思つたので私の立場はすぐにきまつたのだ<sup>32</sup>。

前者のエッセイで深沢は、天皇制が自分の望む通りにならなかったという理由でがっかりし「新種」や「交配」、「馬鹿な人だナ」などの過激な言い回しで、皇室が血族結婚を繰り返して人間とは全く違う、皮をむいた蝦蛄のような存在になってほしいと自分の「精一杯の祖国愛」を述べている。天皇一家が人間に近づいてくることへのこのような反語的揶揄が、「風流夢譚」では夢というフィクションの形式の中で、直接彼らが非人間的な存在にされつつ揶揄される形へと転化したのではないか。それに加え、後者の文章で自分は元々政治に全く興味がないが、なぜか「アンポ反対」には「巻き込まれ」たと言いつつ、それを支持する意見を示していることは、作中の夢で天皇制に関わる事柄にだけ強く興味を示す「私」を想起させる。安保闘争からの影響は、後に深沢が「風流夢譚」を書いた頃を回想する叙述、「あのころ安保の騒ぎがあつて、ああいうふうには私に反映したと言うのは、後になって人に言われて気がついた」<sup>33</sup>からも確認できる。まとめれば、作中の時代的コンテクストを喚起させる表現や他の文章との関わり、すなわち、作品の持っている際立つ同時代性のため、本稿で導出した主題と結び付いた形で内在している作者の政治的な批判意識が見逃せないとということである。

ここで注意すべきは、そのような同時代の政治に対する批判が、覆い隠される構造にもなっていることである。特に、作品構造は天皇制への批判を弱化あるいは「隠蔽」する形を取っていると思われる。荒唐無稽な展開を始め、腕時計との関係を扱う現実の

部分が物語の主となるプロットの構成により夢の話だけでは意味的に完結しないこと、そして小説＝フィクションの内部に夢というもう一層のフィクションが挿入される形式を設定することで<sup>34</sup>、夢の内容はより現実性を失うようになる。そもそも腕時計に関する物語が小説の中心軸でなく、後で付け加えられた付随的なものであることは、小説創作への深沢の説明、「先ず四つの短歌だけを先につくった。これに肉付けするために、つまり和歌をもて遊ぶコッケイさを出すには、村長とか、隠居を出すより、皇室一家を出すのが一番だと考えたのだ……」<sup>35</sup>からも見て取れる。また意図的な漢字の誤記、例えば、「左慾」や「榮養榮華」はパロディー的な側面を浮き彫りにする一方、それが現実からずれている点では、夢の虚構性を一層強めているとも思える。このような仕掛けにより、夢の物語は現実での腕時計との物語の反映にすぎない副次的なものに還元され、天皇制批判のフィクション性が強化されるのである。ひいては、夢の話が現実原理の歪像にすぎず、本意は現実にあることを暗示するという意味では、テキストの構造自体が一つのイロニー、いわゆる構造的イロニーとなっているとも言えるだろう。

隠蔽の意図は、最初の文の中の「夢判断」という言葉にも窺われる。同名の著書を書いたフロイトから深沢が実際に影響を受けたかは不明だが、一部の論者によって推測されているようにフロイト的な意味として夢判断を使っていると見なすと<sup>36</sup>、これも天皇制に関わる内容に本意がないことを示すためのプロット上の企画の一部として捉えられる。フロイトにとって夢判断における基本的な前提の一つは、夢の顕在的内容は圧縮や置き換えのような夢の作業により潜在的思考が変形したものだということである<sup>37</sup>。これを踏まえると、夢の皇室一家の処刑は置き換えられたり圧縮されたりした二次的な表象となり、夢を見る主体の実際の望みとは異なるものだ、ということ「夢判断」という言葉が仄めかしていることになる。夢の顕在的内容を、フロイト的に潜在的思考の変形と見ようとも、本稿のように現実の反映と見ようとも、同じく夢自体は本質的な意味を持たないのだ。つまり、テキストの構造や多様な仕掛けが同時代への彼の批判意識を隠蔽する機能を有しているということである。

#### 4.2 グロテスクとしての天皇専有

しかし、この隠蔽の構造および仕掛けが実際に上手く機能しなかったことは誰の目にも明らかである。インチキ性と人間性を主題としている小説ではなく、天皇制や革命を取り上げることで当時の社会に一石を投じた作品として理解されたからである。これは作者の予想に反する結果であったに違いない。

私は、自分の首が、スッテンコロリンと落ちた—という描写をされても、“コッケイだなァ、おかしいなァ”と思うだけで、不愉快な気持ちはしない。皇太子だって、ガラガラ笑って読んでくれるだろう、と思って書いた。けれども、あとで、みんな

に注意されて、今では申し訳ないことをしたと思っている<sup>38</sup>。

上のような深沢の予想を大幅に上回る反応が出てしまった原因、換言すれば、この作品の構造的イロニーとしての隠蔽という企画が無化された原因は何だろうか。表面的な理由は、確かに天皇・皇太子夫妻の処刑を描いたという<不敬性>に他ならない。無論、戦後の始まりから1960年までの約15年間の中で、不敬性を読み取れる作品は「風流夢譚」が初めてではない。天皇制への諷刺や批判意識を内包している作品は少なくなく<sup>39</sup>、渡部直己が述べるように、皇室への憧れや欽慕を描こうとすることで逆に不敬小説となってしまう作品群も存在する<sup>40</sup>。もっとも、管見によれば、それ以前に直接天皇らの処刑を描いた作品はない。戦後に不敬罪は廃止されたが、大日本帝国の時代を生きてきた日本人に皇室への愛情や親近感などを含む複雑な感情や心理が内面化されていたとすると<sup>41</sup>、処刑に関するところが不敬な表現と見なされたことは不自然ではない。しかし、「人間宣言」から14年も経っており、もはや天皇の処刑=王殺しという図式が成立しなくなった時点で、天皇・皇太子夫妻の死を夢の中で描くことがフィクションとして受け入れられず一大センセーションを巻き起こしたのは、他の理由があったからではないか。

逆に考えてみると、その時期であったからこそ、そのような結果がもたらされたとも思える。まず天皇という題材が持つ、フィクションの拒否という特徴は、戦後になっても同じであった。天皇らが夢の中で本物とは思われない表象として描かれているとはいえ、中野が小説で示唆したように、現代小説で天皇を扱うとそれは真実/虚偽の問題になり、小説に許容されるべきフィクション性は拒否されてしまうのである<sup>42</sup>。それに加え、夢の中で天皇および皇室が表象されている、その在り方に焦点を当てなければならない。「風流夢譚」は皇太子の結婚以降大衆天皇制が定着していく中<sup>43</sup>、特にテレビなどのメディアを通して大衆にとって身近な存在になっていった皇太子夫妻や天皇夫妻を、暴動が起きた世界の中で再度親しみに欠けた存在、人間性が剥奪された奇怪な形象として描いている。構造的イロニーが仕掛けられているとはいえ、フィクションすら拒否する天皇・皇室を、なおかつ時代の流れに反する表象として<専有>しているのである。

ここでの専有がまさに<グロテスク>的であることに注目すべきだ。歴史的に多様な意味を持ってきたグロテスクという用語は、崇高と対比されるものとして主に滑稽さや奇怪さを創造する美学概念として定義できる<sup>44</sup>。内容のみならず創作態度や構造、効果にも適用可能であり、享受においてのみ経験できる点が特徴的である<sup>45</sup>。先行研究の検討の際に確認したように、この作品への反応が奇怪さによる不愉快と、諧謔としての愉快に分かれたことを考えると、作品の内容が滑稽さや奇怪さを醸し出す点ばかりでなく、受容の側面でもまさにグロテスクであったと思われる。さらに何よりも、

グロテスクなものは疎外された世界である。(中略) 疎外されたといえるためには、

われわれになじみ深く気がおけないものが突如、奇異で無気味なものとして暴露せねばならぬ。そのとき変貌してしまうのはわれわれの世界である。突発性、不意打ちがグロテスクなものの本質的属性なのである<sup>46</sup>。

という定義を適用してみると、「風流夢譚」は皇太子の結婚や安保闘争以来のなじみ深い1960年頃の日本社会を、突発的で奇怪な世界、特に非人間的なインチキ皇室が描かれる夢をもって攪乱・暴露しているのである。その点では、「原則として秩序を破壊し、地盤をずり動かす」<sup>47</sup>というグロテスクの特質にも符合する。また、グロテスクなものが本質的に人間以外の存在の受容とも深く関わることを考慮に入れると、象徴天皇制のもとで人間ではあるが象徴という曖昧な存在になった天皇がしだいに人間に近づいていった当時に、天皇・皇太子を、「これがおいらの祖国だナ日記」でもすでに確認したように、人間以外の存在にすることは、彼らを再び反対側に押し出すことであったに違いない。

だとすると、このようなグロテスクな専有は、読者をして不愉快さを即時的に惹き起こせしめると同時に、皇室と国民の合一過程の最中で再び<皇室/日本人>の線引きをしようとする政治性を浮き彫りにすることで、物語分析から読み取れる主題および政治性を隠蔽する仕組みを無化していると言えるだろう。「風流夢譚」が単なる<不敬小説>になってしまった所以はここにあるのではないか。

## 5. おわりに

本稿は、物語の構造分析を中心にして「風流夢譚」を再考察し、現実と夢とが一對をなす関係を明らかにした上で、<人間/もの>、<本物/インチキ>の認識構造を解体・再構築しつつ、人間性を求める諷刺的かつ浪漫的な小説と捉え直した。そして、プロットの構成や夢物語の形式などの仕掛けによって、作品に内在している天皇制や革命に関する政治性が隠蔽される構造的イロニーが成り立っていることも見出した。実際にそのような企画が無化されたことは、当時形成されていた日本社会での秩序や感情的地盤を揺るがす転覆性を有する、夢でのグロテスクな天皇専有によって惹き起された読者の受容時の不愉快さ、そして<皇室/日本人>の線引きに起因すると分析した。反時代的でグロテスクな天皇・皇太子夫妻の表象により、それ以外の諸要素が捨象されたということだ。戦後文学の場においては「風流夢譚」自体も、1960年頃に成立していた日本人と皇室の新たな関係における綻び、すなわち当時の大衆天皇制イデオロギーが隠蔽しきれなかった裂け目から浸透してきた不気味でグロテスクな歪像であったと言えよう。

## 註

<sup>1</sup> 以下、「風流夢譚」の引用は『中央公論』（1960年12月号）に依拠する。

- <sup>2</sup> 三島由紀夫は、彼が「風流夢譚」の推薦者であったとの話に対して、「風流夢譚」の推薦者ではない——三島由紀夫氏の声明（『週刊新潮』1961年2月27日号）で反駁したが、多くの論者は実際に推薦したばかりでなく、「憂国」（『小説中央公論』冬季號、1961年1月号）の創作にも影響があったと推測する。詳細は、井出孫六「衝撃のブラックユーモア——深沢七郎「風流夢譚」」（『新潮』1988年12月号）、157頁；根津朝彦『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件——「論壇」・編集者の思想史』（日本経済評論社、2013年）、187頁を参照。
- <sup>3</sup> 「風流夢譚」事件は幾つかの定義ができるが、まとめれば、狭義は「風流夢譚」が右翼勢力や宮内庁から問題視されたこと、または「嶋中事件」を指し、広義は「風流夢譚」が引き起こした文壇的、社会的な反響全てを意味する表現として使われる。本稿では広義の意味でこの表現を使う。川村湊『戦後文学を問う』（岩波親書、1995年）、58頁；根津『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件——「論壇」・編集者の思想史』、155頁を参照。
- <sup>4</sup> 加藤秀俊「調査記録——心のほころびの反射鏡」（『思想の科学』1962年11月号）、19頁。
- <sup>5</sup> 中野重治「テロルは右翼に対しては許されるか」（『新日本文学』1961年1月号）；大岡昇平「病んでいるのは誰か」（『群像』1961年2月号）；中村光夫「文芸時評——昭和三十五年十二月号」（『中村光夫全集』第6巻、筑摩書房、1972年）。
- <sup>6</sup> 江藤淳「昭和三十五年十二月」（『全文芸時評』上巻、新潮社、1989年）；花田清輝・江藤淳・寺田透「創作合評」（『群像』1961年1月号）；白井吉見「深沢七郎の「風流夢譚」」（『白井吉見集』第三巻、筑摩書房、1985年）；野間宏・植松安太郎「日本の差別構造と天皇制」（『現代の眼』1975年6月号）。
- <sup>7</sup> 武田泰淳「夢と現実」（『群像』1961年2月号）；吉本隆明「深沢を孤立させておいて何の“言論の自由”ぞや」（『日本読書新聞』1961年2月20日号）。
- <sup>8</sup> 黒古一夫「反天皇制小説の運命——「風流夢譚」と「パルチザン伝説」」（『日本文学』1985年1月号）。
- <sup>9</sup> 相馬庸郎「深沢七郎と「政治」」（『日本文学』1994年9月号）、47頁。
- <sup>10</sup> 加藤典洋「一九五九年の結婚」（『群像』1988年9月号）。
- <sup>11</sup> 川村『戦後文学を問う』。
- <sup>12</sup> 郭曉麗「<風流夢譚>事件と天皇制」（『日本研究』2020年2月号）、121頁。
- <sup>13</sup> 伊狩弘「風流夢譚論」（『日本文学』1991年4月号）、46頁。
- <sup>14</sup> 日沼倫太郎「存在透視力」（西野孝男編『深沢七郎の世界』、新評社、1974年）、242-243頁；相馬庸郎『深沢七郎——この面妖なる魅力』（勉誠出版、2000年）、66頁。
- <sup>15</sup> 西川長夫「深沢文学批判の批判」（『思想の科学』1962年11月号）。
- <sup>16</sup> ヒカリクラブ「返歌・深沢七郎「風流夢譚」を読み返す」（『G-W-G = ゲー・ヴェー・ゲー（ミーヌス）』2021年1月号）。

- 17 彼らの研究に、連続性を強引に見出そうとする傾向がないとは言い難い。西川長夫は「檜山節考」からこの作品までの深沢の文学を「生活人の文学」と規定し「檜山節考」の登場人物間の関係性のモチーフ、つまり〈おりん—辰平—けさ吉〉の構造を他の作品や「風流夢譚」に見出そうとする。しかし「おりん」という老婆の持つ意味をあまりにも広く展開しているため、多少強引な適用ではないかと疑問が残ることも否定し難い。ヒカリクラブの研究の場合、天皇という主題が「風流夢譚」の前後の作品である「檜山節考」や「東北の神武たち」、「流転の記」（『群像』1962年4月号）、「みちのくの人形たち」（『中央公論』1979年6月号）にも見られ、「風流夢譚」での天皇一家の殺害は深沢の一貫した主題であると主張するが、天皇を「風流夢譚」ほどの比重で取り扱っている作品は他にないという点には注意すべきだ。
- 18 絳秀実は腕時計を人間の意識に対応させ、「対象a」として理解する。という観点のもとで、天皇家の殺害は単なる嘘ではなく、現実界（無意識）の「現実」で起ったことと見なす。絳秀実『「帝国」の文学——戦争と「大逆」の間』（以文社、2001年）、6-7頁を参照。
- 19 渡部直己『不敬文学論序説』（筑摩書房、2006年）、174頁。
- 20 ヒカリクラブ「返歌・深沢七郎「風流夢譚」を読み返す」、160頁。
- 21 渡部『不敬文学論序説』、171-172頁。
- 22 前田愛の指摘によると、天皇の辞世の歌の中の「ちどりぐさ」は、催淫薬として有名であるイカリソウの異名でもあり、皇后の辞世での「濡るる」にもわいせつなニュアンスが内包されている点でも諷刺的と見ることができる。前田愛「パロディの問題」（『国文学 解釈と教材の研究』1976年6月号）、89頁を参照。
- 23 吉本隆明「慷慨談——「風流夢譚」をめぐって」（『吉本隆明全集』第6巻、晶文社、2014年）、364頁。
- 24 花田・江藤・寺田「創作合評」、291頁。
- 25 中野「テロルは右翼に対しては許されるか」、98頁。
- 26 野中潤「深沢七郎「風流夢譚」再読——「鬼畜米英」と三島由紀夫」（『現代文学史研究』2009年6月号）、66頁；篠沢秀夫「ポルノ情動と庶民的日和見主義」（『思想の科学』1977年4月号）、99-100頁。
- 27 前者の歌の場合、前田愛が指摘したように、深沢が秋山駿との対談でこの歌に言及しながら、軍国主義の時代に父母のために死ぬというところが好きと述べる部分を考慮すると、戦中の天皇制イデオロギーへの抵抗の意味もこの歌に内在していることが分かる。前田「パロディの問題」、88-89頁；深沢七郎・秋山駿「私の文学を語る」（『深沢七郎の滅亡対談』筑摩書房、1993年）、176頁を参照。
- 28 伊狩「風流夢譚論」、43頁。
- 29 伝統としての天皇制という理解としては、深沢を三島由紀夫と並べ、日本の知識人の宿命とし



て、政治的性向に関わりなく天皇制を日本の伝統文化として扱っていると捉えた、平野栄久「民衆と作家のはざまを生きる——「風流夢譚」と深沢七郎の〈宿命〉」（『新日本文学』1973年9月号）、57頁が参照できる。

- 30 根津『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件——「論壇」・編集者の思想史』、159頁。
- 31 深沢七郎「これが私たちの祖国だナ日記」（『群像』1959年10月号）、223頁。
- 32 深沢七郎「騒げ、騒げ、もっと騒げ」（『群像』1960年8月号）、167頁。
- 33 深沢七郎「生態を変える記」（『深沢七郎集』第9巻、筑摩書房、1997年）、26頁。
- 34 長谷川泉「風流夢譚」（『国文学 解釈と鑑賞』1972年6月号）、101頁。
- 35 「深沢七郎の見た夢」（『週刊文春』1960年12月12日号）、58頁。
- 36 ヒカリクラブ「返歌・深沢七郎「風流夢譚」を読み返す」、157頁；桂『「帝国」の文学——戦争と「大逆」の間』、3頁。
- 37 フロイト『新訳 夢判断』（大平健編訳、新潮社、2019年）、210-242頁。
- 38 「深沢七郎の見た夢」、58頁。
- 39 例えば、田宮虎彦の「霧の中」（『世界文化』1947年11月号）、堀田善衛の『記念碑』（『中央公論』1955年5-9月号）、今日出海の「天皇の帽子」（『オール読物』1950年4月号）など。
- 40 渡部直己は、いわば「恋闕」の情を表した作家の作品が皇室の人物を中心人物とした上で、一人称を使ったり、極めて私的なところまで描出したりした結果、不敬性が生じると捉えた。そうした作品の例としては、平林たい子の「昭憲皇太后」（『面白倶楽部』1950年6月号）、小山いと子の『皇后さま』（朱雀社、1959年）、小泉譲の『小説天皇裕仁』（荒地出版社、1960年）などが挙げられる。渡部『不敬文学論序説』、156-163頁を参照。
- 41 戦後にも天皇（制）が日本人の精神的な部分における影響力を依然として持っていたことについては、竹内好「権力と芸術」（阿部知二編『講座現代芸術』第5巻、勁草書房、1958年）、22-23頁；野坂参三「民主的日本の建設」（『野坂参三選集・戦時編』新日本出版社、1962年）、454-456頁を参照。
- 42 天皇のことを小説にすることに対する中野の指摘については、中野重治「その身につきまとう」（『中野重治全集』第3巻、筑摩書房、1977年）、197-198頁を参照。
- 43 この時期の大衆天皇制については、皇太子の結婚やミッチー・ブームを大衆天皇制の定着と見なした、松下圭一「大衆天皇制論」（『中央公論』1959年4月号）、30-39頁を参照。
- 44 ヴィクトル・ユゴー「クロムウェル・序文」（西節夫訳『クロムウェル・序文／エルナニ』、潮出版社、2001年）、17頁。
- 45 ヴォルフガング・カイザー『グロテスクなもの——その絵画と文学における表現』（竹内豊治訳、法政大学出版局、1968年）、250-252頁。
- 46 同上、258頁。
- 47 同上、74頁。